文展狂女
手車妙義

琴女英人傳

全

へ13
3073

へ13
3073
特
へ13
3073

藤井蔵書
第　号

讀書心得之記

一可成丁寧ニ讀ベキ事
一破損及塗黒スベカラズ
一又貸ハ一切嚴禁之事
一火ノ上ニテ心ズ讀ベカラズ
一讀書中中央迄讀候節
ハ心ズ栞ヲ入置ベシ決シテ
本ヲ折ベカラズ

右之條箇々相守可申者也

藤井氏藏書

巻

山東京傳作 歌川豐國畫 前編

古今未曾有多
肺腑
今こゝふ国十郎
鬼魔
甚角
やや

兵庫文記

文展狂女
手車之翁

琴聲美人傳

全六冊

文安の比、都紀河原にありさはとおひやるふ。心大賣の店あり。水ちゝくるの
たくさん尽くし。花屋に軒ならべ。青柳の糸をあびゝ。山崎の小櫃に繪も深草
焼乃彩色ふけおさまと。環餅の螺に形も。編笠焼ふかくちとうたれ。福
廣聖の辻談義。妙高尼乃針供養。鐘鑄の勸進。高足駄の行者。曲舞
女。琵琶法師。あやつり人形。金比羅ゝ。一寸法師乃
蟷螂舞。かるうざの賈ゝ。賈あり。伊勢國のお小娘。蟹滿寺のへび女。頼政の
獲。廣有が怪鳥。たぐひめづらしくあやしき物をあんとるゝ。家所せまで
立。たくさんびて。楊弓の音。辻打の大鼓ふまぐるちやるめるの笛。かまびすくきこ
えて。諸人の耳目をおどろかしけん。今昔紙草紙。そのいとぐち紙とくたかん。

文化十二年乙亥秋稿成
十三年丙子新草紙

醒齋

山東京傳識

江戸芝神明前 丸屋甚八梓行

近世畸人傳所載

文ひろげの狂女

亡執の雲ぞや余所に散る花

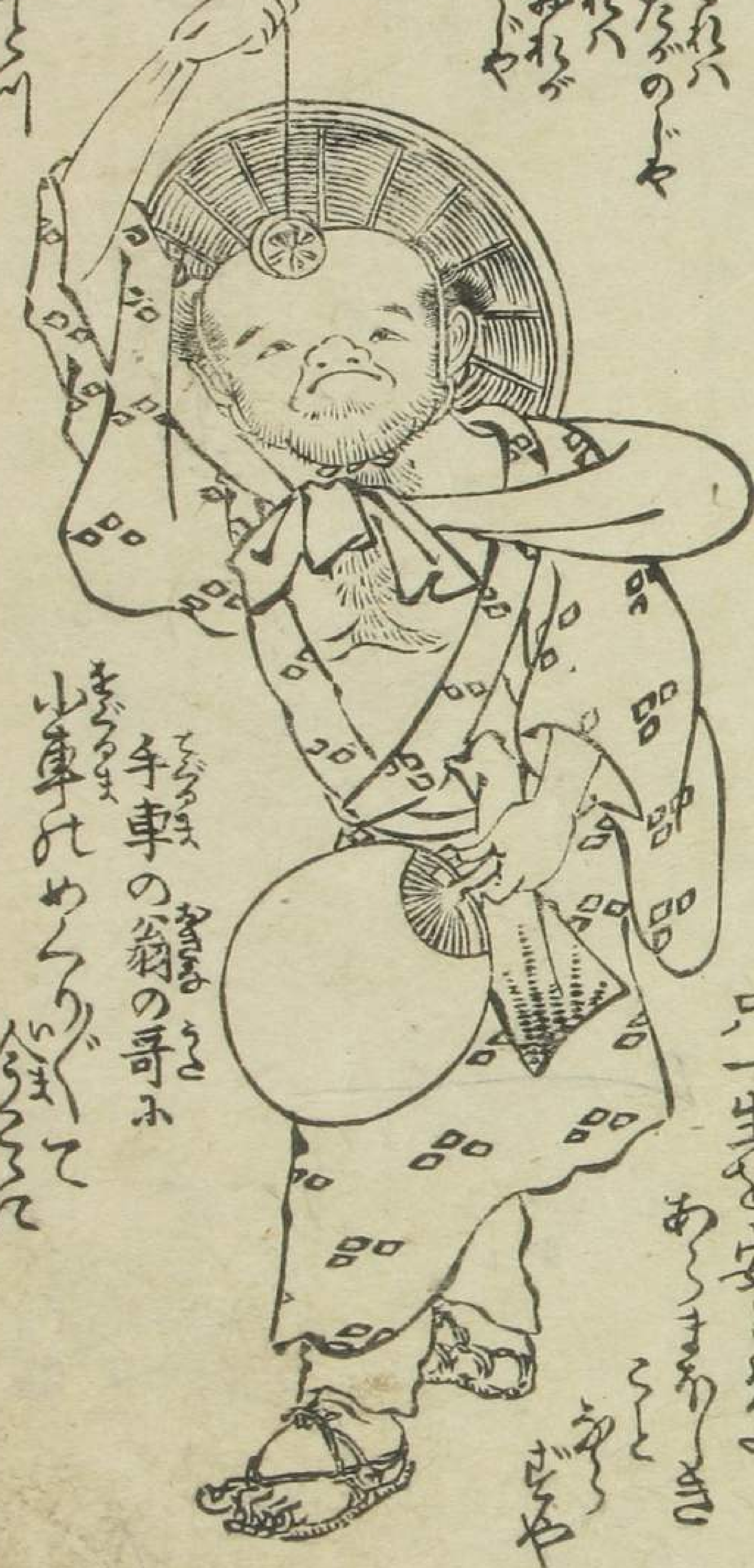
蝶々子

熟浮世を観ずるにゆめの雫下さゝるの露おくれさきだつ世のならひにてさら光陰のすみやかなること江漢の流るゝ如く春去秋来り花ひらけ葉おちて

燕子鴻雁時を知るがごとし世に志ありとても人情のなかひみてこれを常とするゆゑにこれに對しておどろかず朝夕唯奔走しその營業とするところ樂に耽るところ異なれども都是名利の二つをいづることなしされバ人無常迅速の

同書所載

手車の翁



「これハたがのじやこれハおれがのじや

理をおしてバ其果報ハおの〳〵高下あれどもあながちに他を貪り瞋心なく只一生を安くするはあしきまわりことなしぞや

手車の翁の哥に

小車のめぐりめぐりて今こゝにたてゝはそれはこれハおれがのじや

花ひらけたかふちるがれ来るか

立圃

京都たぐと河原
へびつかひの女
青大小のお百

題娘
輕業
振袖美哉
二十八娘
近来
大入り
闇

へびつかひ
おそろしきけだもの
雄子の蘇　芭蕉

如雲
渡綱渡紙
世難渡
御一人前
十六文
京山人題

風羅念佛の願鉄坊

河原の
女かつらざ
太夫
額の小三

願鉄

弘ハ
ゆくゆくは
よくなる
綱渡り
人の世ならん
京傳

八剣左衛門雲連

敵を焼や寝姿の閨乃さめごと其角

京都河原のけしき

比あらし見よみな濁るもの

芭蕉

錦織が実助

鳥羽判官入照家臣

山住猿平太

洛外八幡村
いさごづつの
男だて
五尺
深五郎

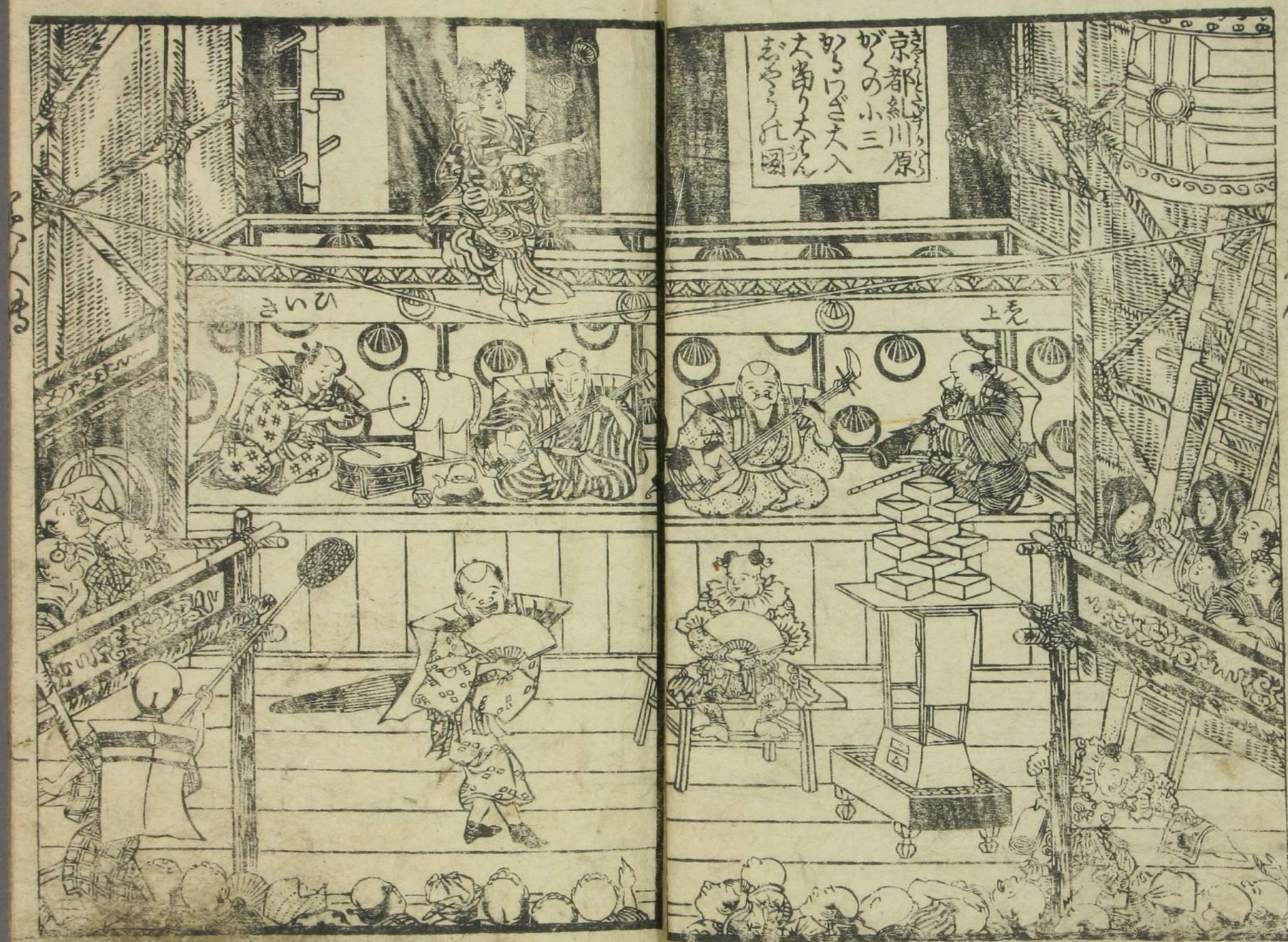
うぐいはとや籠ちるとゆく
鄙乃ひま

其角

願鉄が亡魂

〔あらすじ〕いまハむかし ひがしやまどのの時代
文安のころとかや 京のほり川にすみける しやくわん
ぐわん新左衛門といふものあり たるおくぐるハ
月丸といふおさなき男子をもちけるが つまハ さき
さきだちて身まかりければ ちんぐわんの
おさなき ちごまりの女ハ ゆかりのものにあづけま
ぐわんやうやく氏の養子に まゐらすりあさ
づまの そく女うつくしきひめと いとはなれぬ あづけ
ゆきてなかりける「まつりの中に おがみのおぎさま見
くまつるゆゑに そのうち山むきさる平太を
ところにつけゝ ゆきてなるものを おとろへさゝ
せんとさまく あるまきたくみを めしゆか
てるのめのこどもを おかりくるところにつけえん
ぐわんのとくしくなりをさそひわかう
らんをまもるものに ほりひとをたのみて
そうりぬる〇 そのところの なのたび かくくに
がくの小さんといふ女のかゞつぎにあまりらん
くつきさ娘ゆゑて こうんまれつるかるうぎさ紙
まけるゆゑに大入大事りゆそて けんぶつらん
じゆんとお ある ねんじゆう をぞ ちてうる
〇又お言 こゝろたびれかりくにへびつりひの女
あを大小の おひやくとぞ とうハ廿七八歳なれど
いろつてらしつゝき女のまでさしうちハらうく
つえこれも おきれきれ そやりかり〇 おきてなにけた
ひとり十ぶの かならいねんぶつのぐわんでつぶからと
いふどうしんじや これもへびつりひのさせめのく▲

▲かくふしにまたかちらでゆきてのくにくまの
うちらをとひその日くをおくりたり
〇そこに又しらぐわんいしざきの村に おりなや
やかましくとのやりの おり 娘かしきみなかり
このがくの小さんが そらかりの あるきをおかう
がくの小さんハ ひがいのとくいゆとそきていびし
あうけしそ やうやくおの日くらきらうく人
さぞやきとり小さん ゆあひて そくろの
うち紙かくてうんとかくすらのふちやあに
こうけて うるうぎの もてるとすまちてぞそ
ねくらりかる〇かくて ある日も ゆかされ給て
けんぶつの あるうれん あのがさく〳〵 ちらのゆゑて
へびつりひの おかるもうくひのうちらうりので
なれバ ぐわんてつかりぶ むさうりに人かた紙
まゐらせて おひやくにむかひ ゆかでなれゆて
いひけるハ ほり川の かもでる えんぐわん
さる山ざき村の やまの むすめ かみにはま
とのかをまこそやくとすまひ おそうけふめし
ゆくえんと かけゝい 山ざきとさう 平太くさらぶ
いぬつけ なかひしおくらの かみしきまでのふなへ
もてそ おぼちござらの やつぎさ まかなん さるら
こゝろつけて おさわしや このゆゑ その
あへしきまでとのふ女に そのめがあしく
とさる平太きまるよみく そぞらしやくそを
さがなさかりしやつくさかか
二ばんめおへつゞく


京都紅川原
がくの小三
かるわざ大入
大当り大すん
おやうれ図
ひい
上ち

京都
紅河原圖
かるづる太夫のゆうぐん
開帳

開帳
大入
大入

京と都紀の之稿

まえのつゞき

京傳店

白牡丹

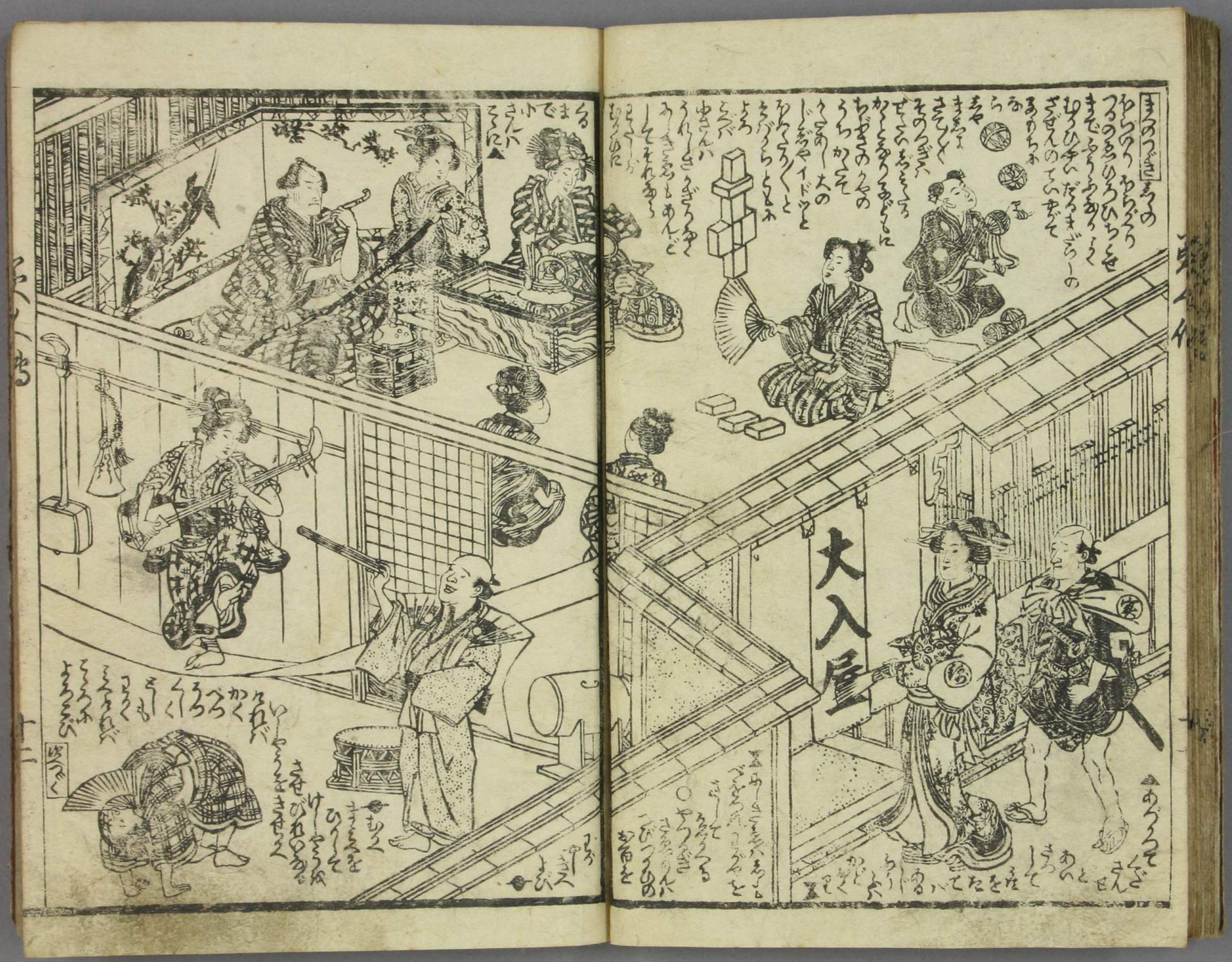
醒齋老人京傳隨筆

○骨董集

古書を引て考へ合せし古画古圖入上編前帙

二冊

後帙二冊


大入屋

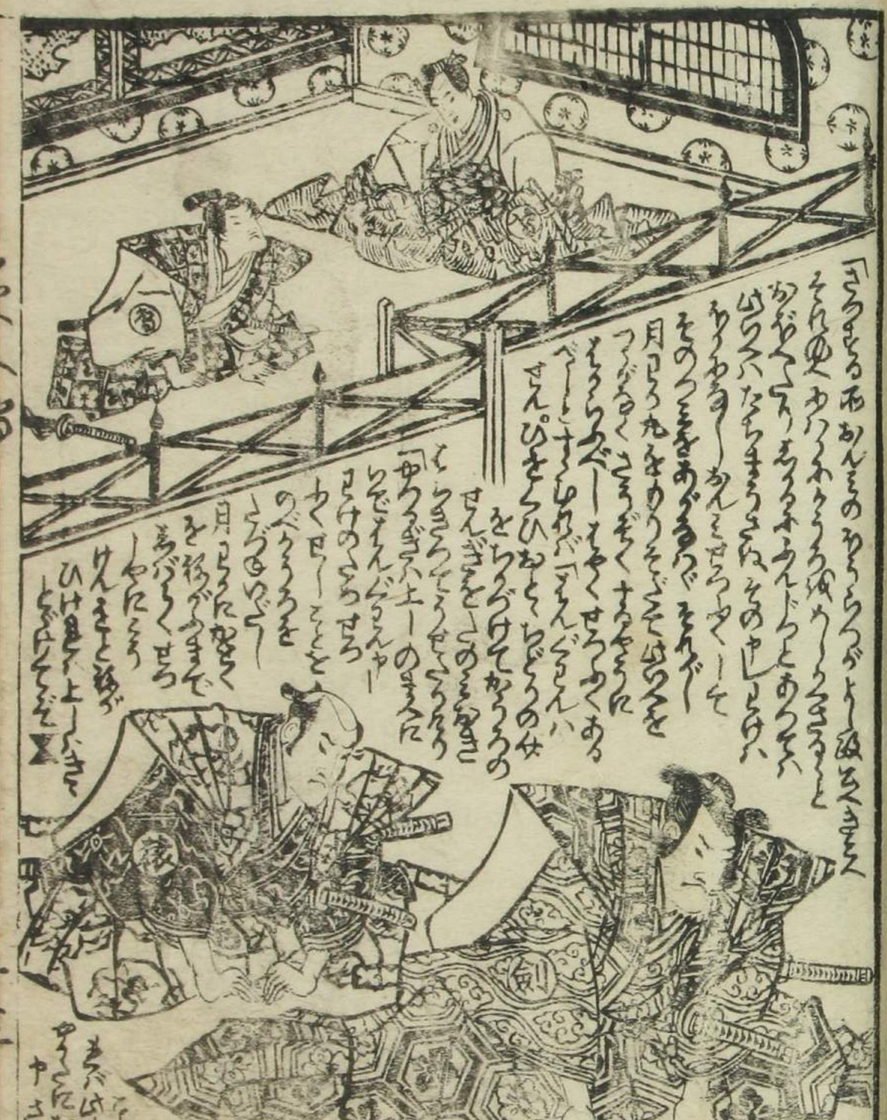
まえのつゞき

▲ふ

▲ゑんげんのまへにいでゝ
えんげんーしろうぐ
きくれ

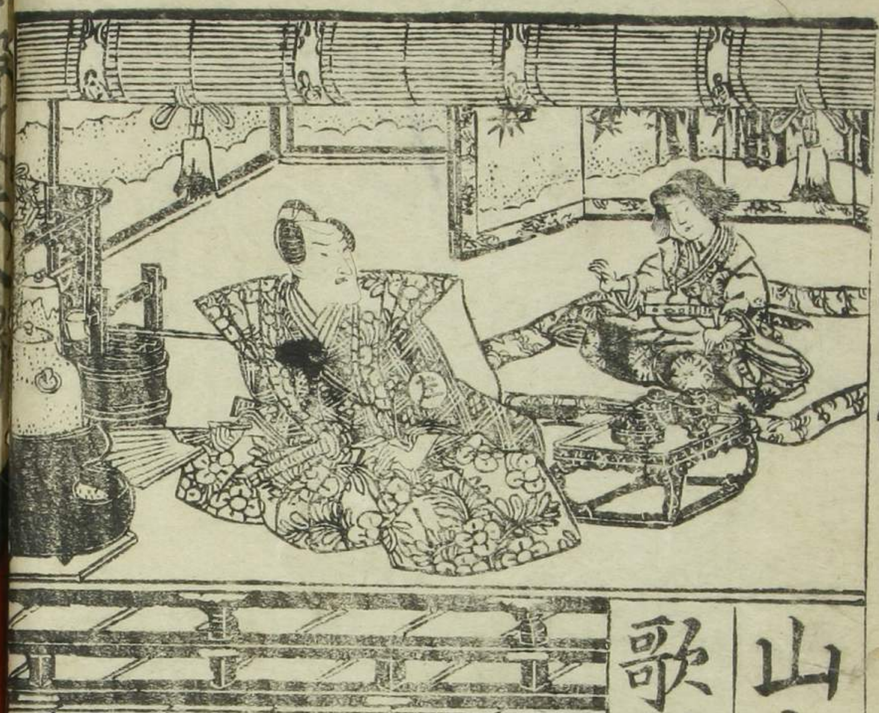
▲ゑんげんをもちゝ
日夜ゆうきまうこくして
ちうのうものぎんの

実
大入屋



琴聲美人傳
下編

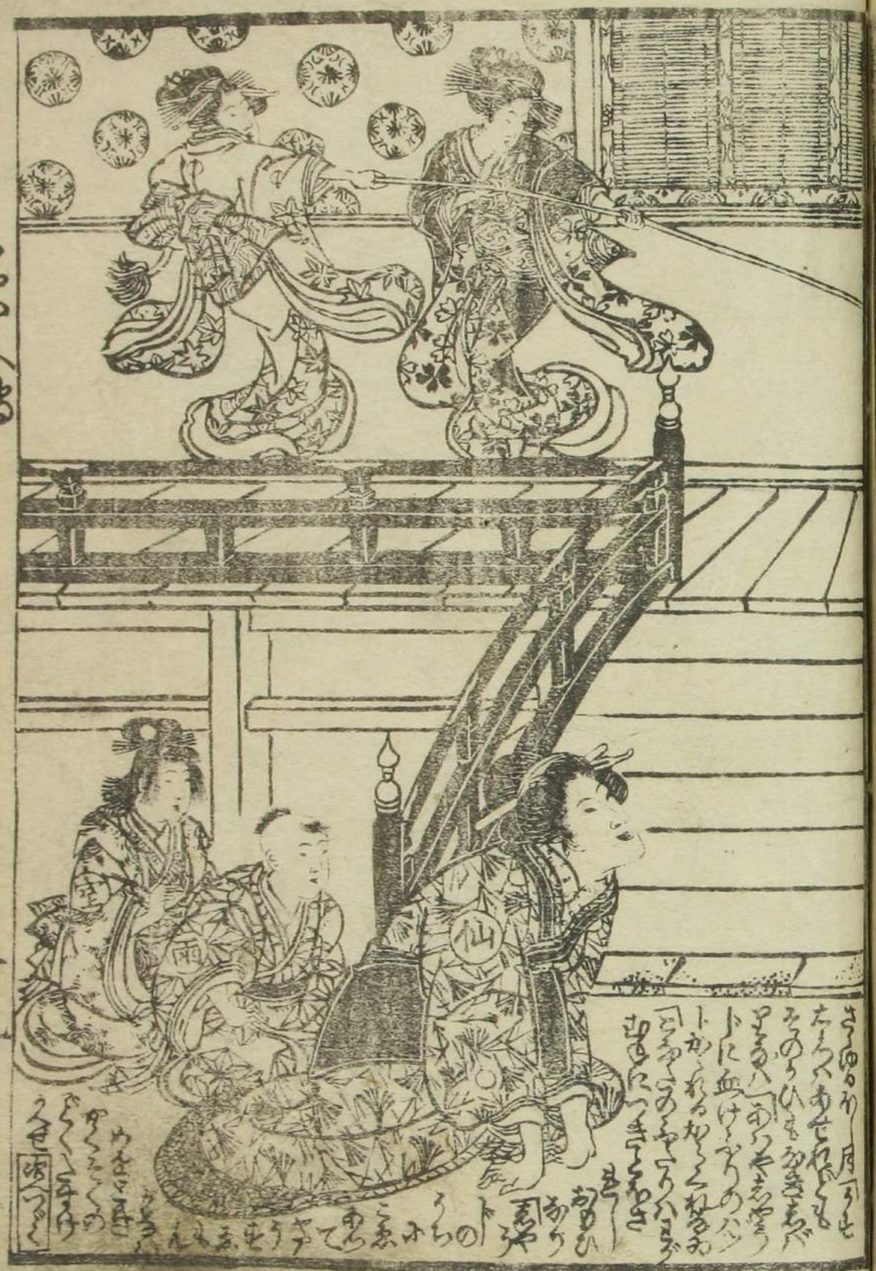
京傳作
豐國画
子之春丸甚板



山東京傳作
歌川豐國画

山東京傳作 歌川豊國画 後編

こゝも徳筆乃二編城
極ふるゝとして
古戸故城
醒齋
骨董集かきうつして
ゑゝ世ゝ友ゝ
松ゝくなるぬる


仙

星

星
白
室
仙
南

［まへのつゞき］すゐのきまつらしゆゑあつてちんぐさん
さるのけらいとなりおぎろうろせんのおぎり
ぐんれのをそむきさまざけーして此かんきを
かうふりそれよりのちハろうにんのそのうゑあの
ろうれと血のこゝろハあれぬるのコレようまさる
あすらいゆるしろおれども又ありてとハ手をまもる
きやうだいの「ヤアそんなにやとおもふさま子なるか
「ヨイ井ちくハうたちのたるやぜさ多めん「ヨ、母の女じ
るにとらのふ「ヨヽすぎこのつがりとなひのまーし「ヤア
「サくこなさそれであらふとのひのいてゐろう
こやうとこるのむりしぐうそあのれなる「かる
をうじもおりそのいれきちのよするやうさるのよと
あまこの子どもふたやされてくるのきくる
ふとひろげの綾女このにはさきの女ろ戸の
そとにうちて宮のらをきくおそり「そぶのしんハ
のぎゞをそらひ氏神のれのむにてうきれの
ひめ此わんぶくのとききれりといひゝ、
うは宮めんが血をこうゆうの血ゆあらせ
べうやをさしてもそぎゆく「うは宮めんハ
くるしげふいき綾つきいゐこうゆうのおのぶろう
みて此わくのひめざすとちどりの母さゐと
うけてえんぐをありときけバひめぎ又ハ此玉を
ぎんも知りしことを人ゆゑ多めるコトばのちの
ぐさんらハコトが一念ハおびうりのそのいられの
あらまーをかくりまうさんいろぞやまぢさん▲

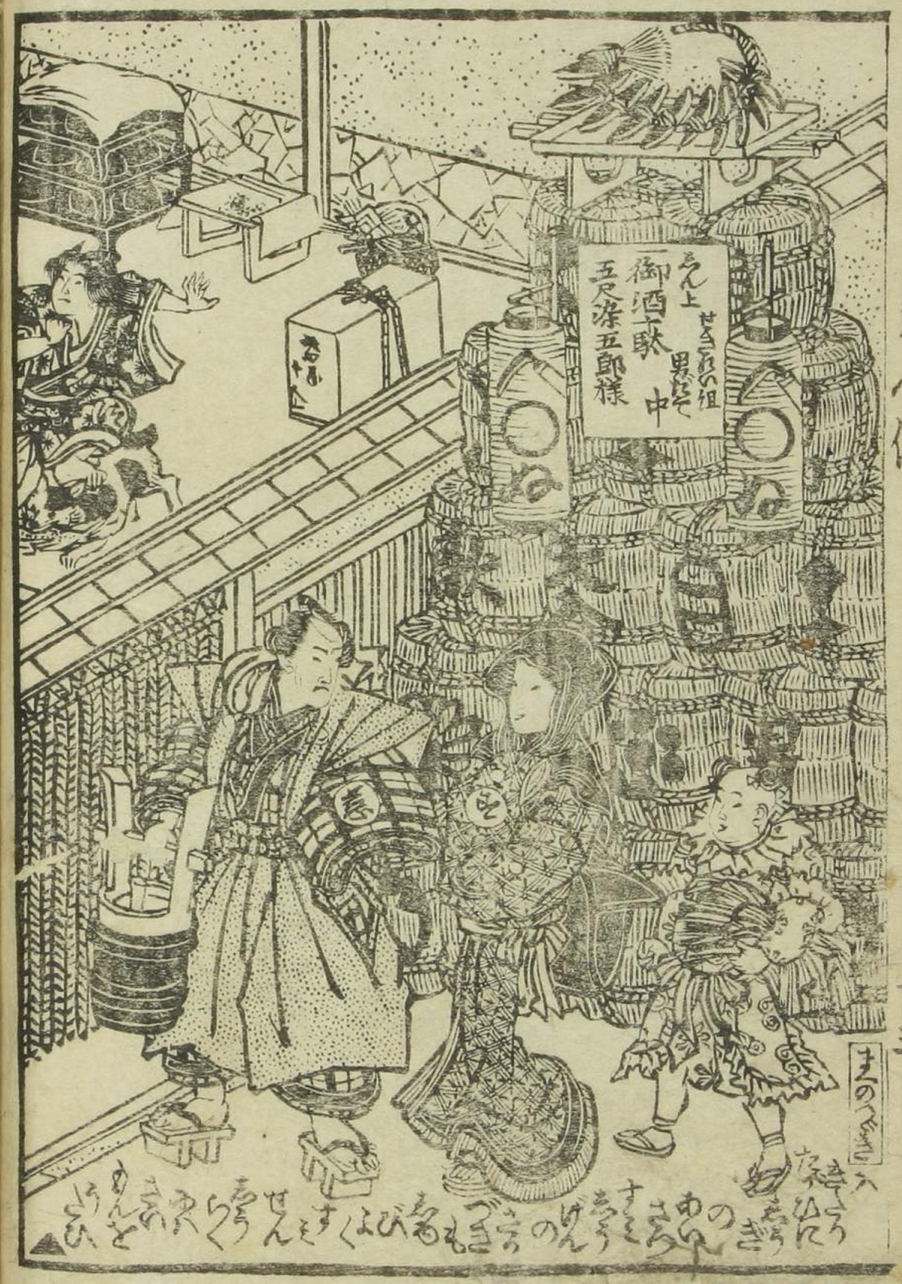
▲ちんぐさんのまうらいのねぎさうらんと
ひそうふかんてうけみりきとゑをまに
うけゆゐにてきけバ人ちがひやくざろ
ありふびん神の これもず一生の
おやまりやどうぞそのゆらりのものに
めぐりあひこの神うらかくきさと
あのりうられそまらんと母がる生をさ
うるさびくに多くものがりさうろ綾
つけられどいゐにそのゆゑりのものに
いぞあらバいゐこのあぎにてすらいきろ
てハコトがゆゑのこゝろのちかみにたゞふ
あれバいゐらのきこのこゝろのそらんハ
これのもまあのコレむすめわりーその
ゆゑりのものにあてことも知るあやうべ
みりきゑなをまにりけらハ此つ玉酉
くさん肉醜ありとのひコトがあんしんを
つげてくれとくりきてそをかくり
なれバ「まうおのそとにゆるなどを
たちきく宮ひろげの綾女
かくー ゆちくるひとつを
やきれりのそかけりて
「つぎへつゞく」

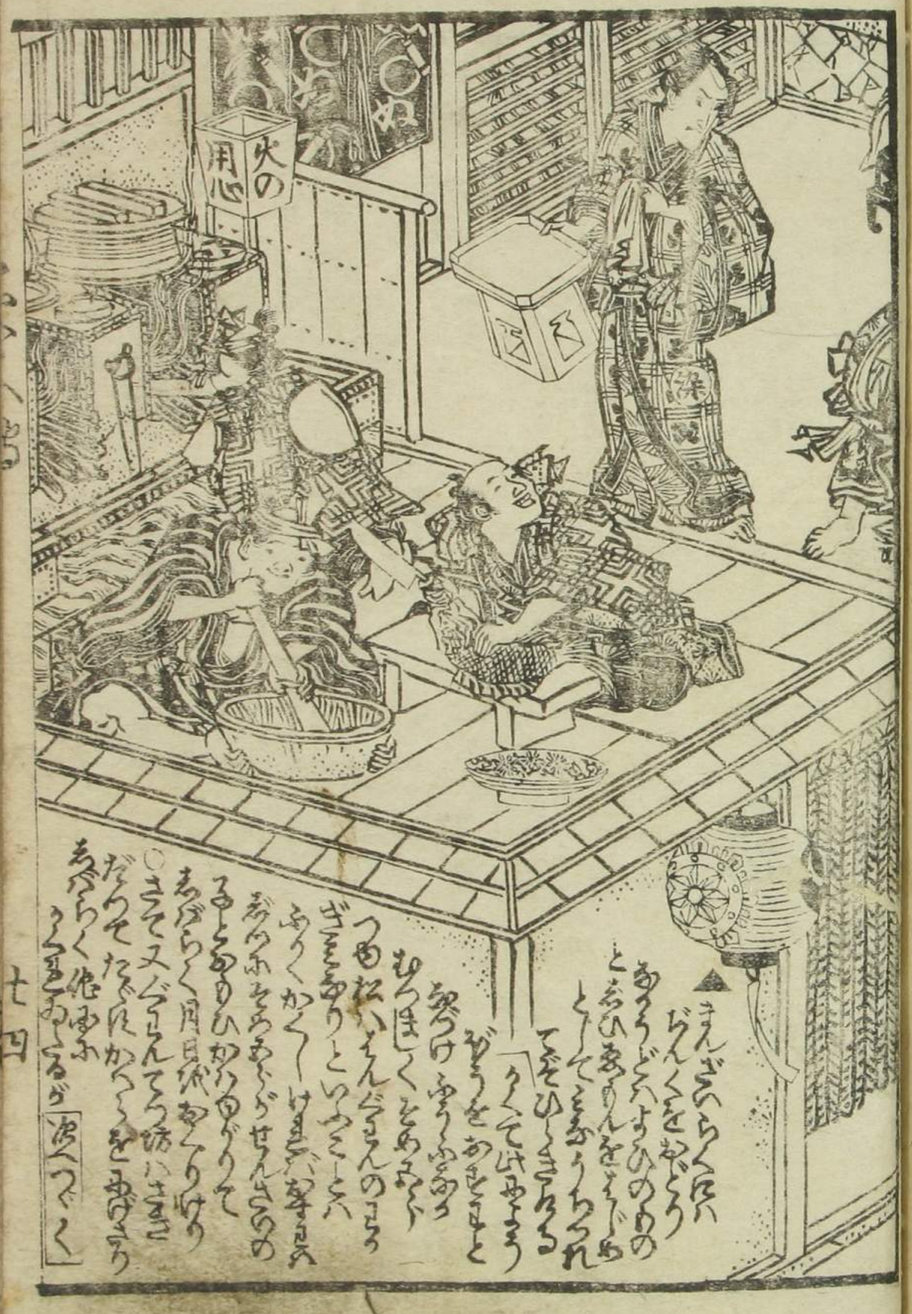
［まへのつゞき］うとまめんかむりひ「さてハ
あの玉のかうきハ又さんよあかコトうれは
とあさんふうくれうるみりきこゑいりもと
たづそうわらのかりふとごの大事がくの
ゆきんといひーの玉のおしをうくれー
そのところにおちておりしコレ此一條うハ
たーりにおひろとおゆりくわんごんゆ女
此もゆせき綾あやうこにかりきをふでの
いござさんとみせきちびひとありあをひろげの
きまうぢらよとよばれあまきのきまものに
やどうけされど此一條ちとざうひりの
あの綾をむけ宮すだおかーくらちぎ〔まき〕が
いゐかりてがてやうにてきてうくりきさいハ
とあさんとあれうりきうかりうりま
くうりき宮うりをきけバあとい中も
いそんも多くちうぎのこの人ちがひ
さぞうりくきてとめのらんとか綾そちくひ
あゐの宮様をきてことさらおぎろの
おんをあれバたちあひのあやうぶもできたに
とすうしひるえてえけるがうきちうハ字を
とこうひ「わウそれらどにてころをつくー
あ玉のくまき綾うきんと云女にまれあすげあげの
ふるまひかんあんせりいあかにのぞまてそまれ
あひーハコトがあんまう あんでおろうとあ玉のかきれの

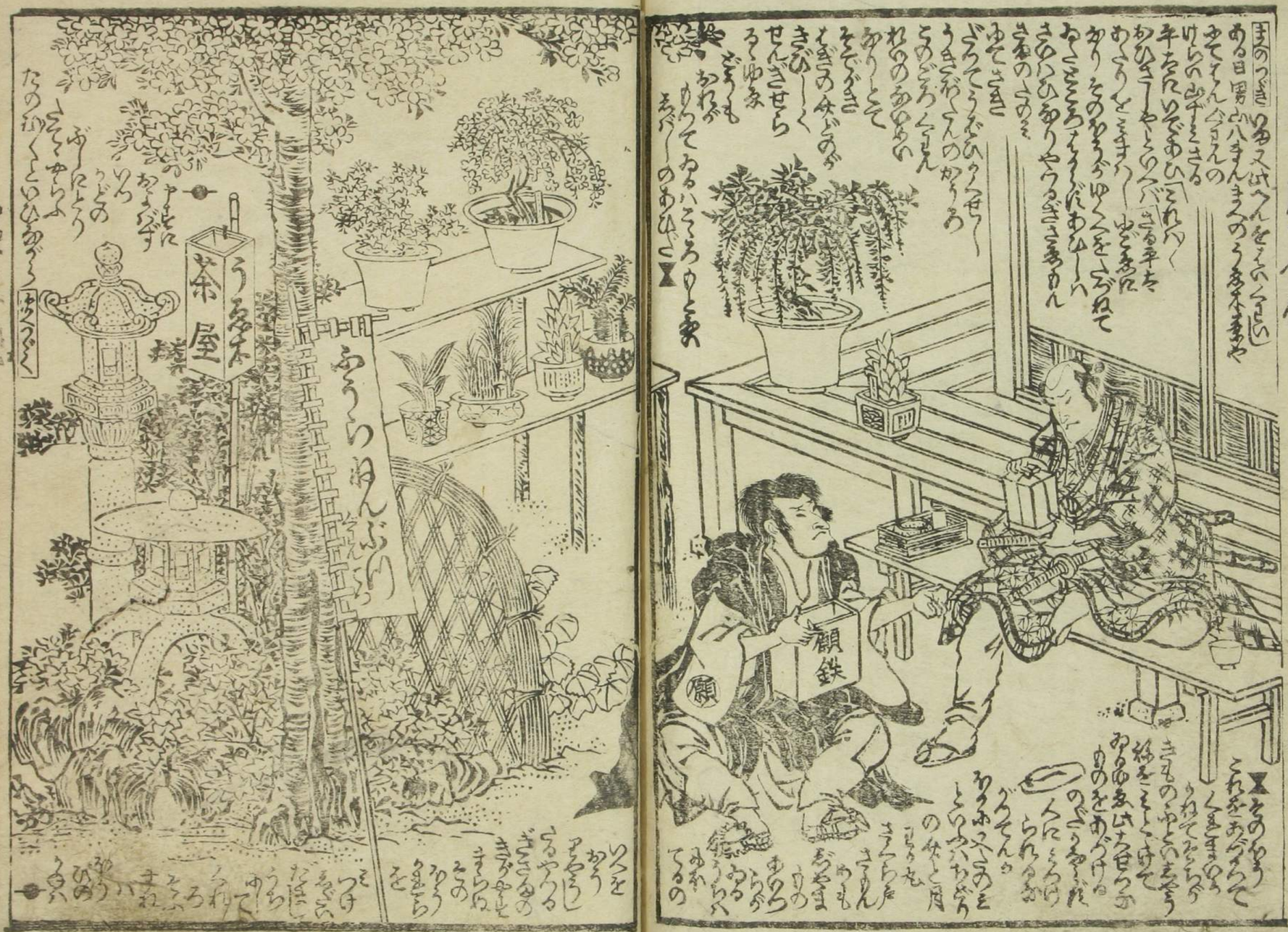
コレ此つ玉酉くさん肉醜ゆう 此母子六用のその此此
かくごサァく此くうを一すンだあーにーて
あれとこうらゑをさらしくびうんそおねふ
たむけよか玉てくぐといわんきんハまりその
とありこれさよとそ あろぞぐをおーぬけバ
おぼざんにうきさるをとほのかこへ「そぶる玉の
やぐりくていゐそこにたてゝるをとは
これハあれがのーどめといひ女母のおつけを
かまうけくり「少さんハこれをつくへとて
さそハおんとのか玉てのりくごとそのゆかりで
ありじゝとうこぐふーくゝろはむこにも多く
まけく ゆむてあむりふちうらもたのをそうり
「うる宮今みりきとが父山ざき村のにぞ宿ひ
いそがやあちちう少さんがゆくへきさうぞて
此ゆ宮きさうり まうまをきゝてうる宮めんが
あんてのをえんじまうな世べかんへてて
此くのおんいゐにかあふましと少さんを
あげまーするむれバ「うる宮めんハ
おあわりてまきあれ仕のざくーそそ
なびきしのぶれバ「み山さんハせぞひがく
らしろにそつひにくびのきでそうわ
うりける「かたされハそこはある
ふくうのまごころとまろうに
あきふーね「つぎへつゞく

まのつぎ
律
さ
仙
宝
妇

小車


御酒駄
五尺深五郎様

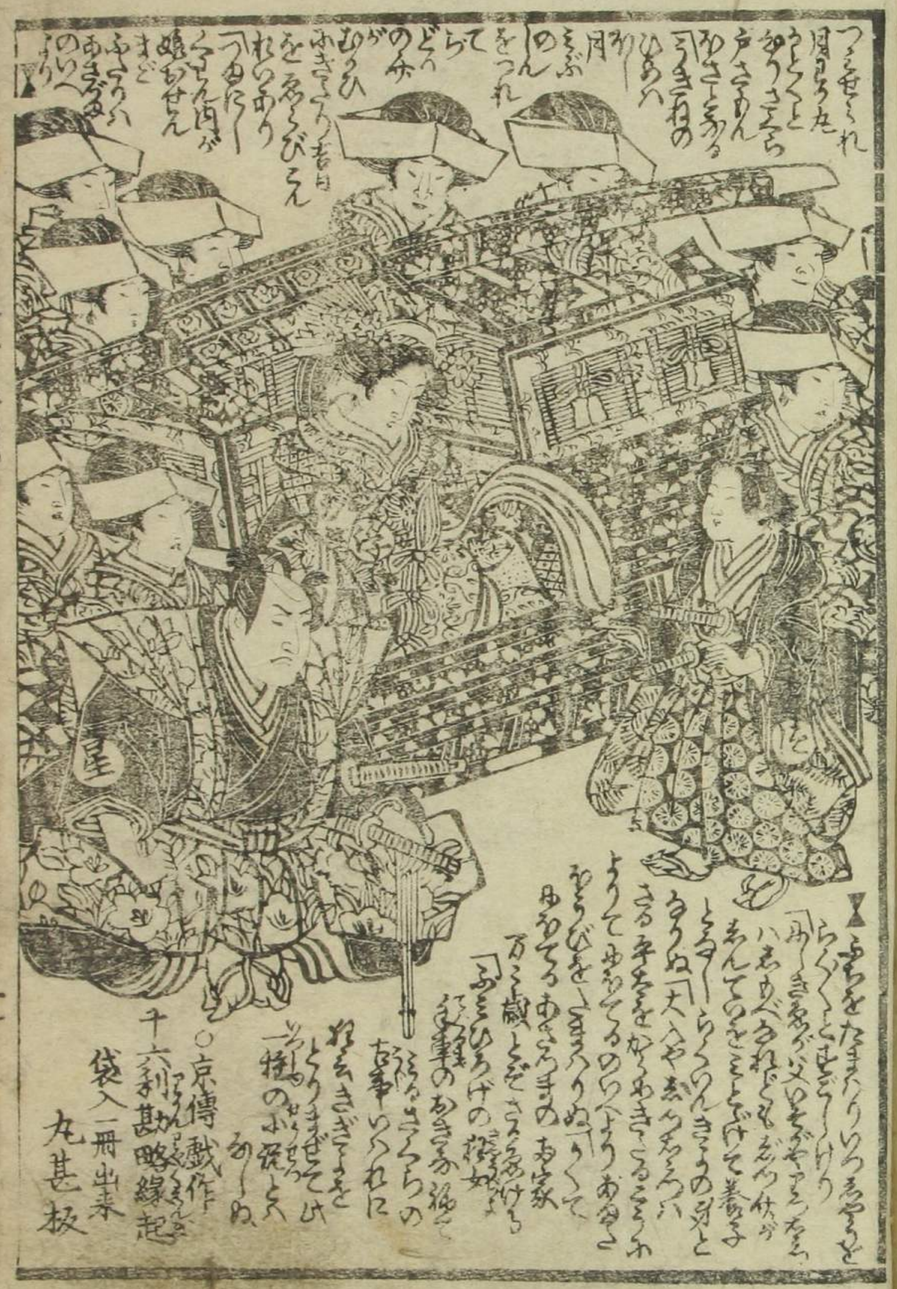

火の用心


顔鉄
茶屋

まへのつゞき

まへのつゞき

まへのつゞき



十六利勘略縁起
袋入一冊出来
丸甚板

豊國画○山東京傳作

筆者 藍屋晉米

○京傳店 江戸京橋銀座一丁目